Event Report

『Japan Digital Theatre Archives』からひろがる、舞台芸術アーカイブの未来

早稲田大学 坪内博士記念演劇博物館

JAPAN DIGITAL
THEATRE ARCHIVES

Index

演劇博物館オンラインイベント
「『Japan Digital Theatre Archives』からひろがる、舞台芸術アーカイブの未来」　開催概要

開催日時　2022.1.24 5:30pm - 7:10pm

主催　早稲田大学 坪内博士記念演劇博物館
新宿から発信する「コロナ以後の新しい博物館」プロジェクト

助成　令和3年度 文化庁 地域と共働した博物館創造活動支援事業

プログラム

主催者代表挨拶		岡室美奈子（演劇博物館館長）	3
第1部	JDTAの紹介	松谷はるな（演劇博物館）	5
	演劇博物館のデジタルアーカイブ活動の紹介	中西智範（演劇博物館 デジタルアーカイブ室・写真室）	8
	事例紹介「SPAC- 静岡県舞台芸術センター」	成島洋子（SPAC- 静岡県舞台芸術センター 芸術局長）	10
	事例紹介「木ノ下歌舞伎」	木ノ下裕一（木ノ下歌舞伎 主宰）	12
第2部	座談会　舞台芸術アーカイブの役割と期待	成島洋子 木ノ下裕一 岡室美奈子	14

巻末資料

JDTAの紹介	23
演劇博物館のデジタルアーカイブ活動の紹介	25
事例紹介「SPAC- 静岡県舞台芸術センター」	26

本ドキュメント制作

編集	中西智範
デザイン	齋藤裕行（Designer, 株式会社日本デザインセンター） 細見裕太（Producer, 株式会社日本デザインセンター）

開会挨拶

中西智範
演劇博物館　デジタルアーカイブ室・写真室

本日は、演劇博物館主催のオンラインイベント「『Japan Digital Theatre Archives』からひろがる、舞台芸術アーカイブの未来」にご参加いただきありがとうございます。全体の進行を務めさせていただきます、演劇博物館中西と申します。どうぞよろしくお願いします。

イベント開催にあたってのお知らせと、イベント全体の流れをご説明させていただきます。本イベントは、文化庁「令和3年度文化芸術振興費補助金　地域と共働した博物館創造活動支援事業」の一環として開催されます。イベント中、ご質問がありましたらQ&A機能にてお寄せください。座談会にて適宜取り上げさせていただく予定です。

イベントの概要をご説明致します。2021年2月の『Japan Digital Theatre Archives』開設からおよそ1年。コロナ禍の厳しい状況は舞台芸術分野でもいまだ続いています。そのような中で《舞台芸術アーカイブ》に求められる役割や期待はどのように変わっていくのでしょうか。舞台制作の現場で活躍される方の視線を交えながら、舞台芸術アーカイブの未来像について参加者みなさまとともに考える機会にしたいと思います。前後半に分けた2部構成として進行いたします。まずは、演劇博物館館長の岡室美奈子より、イベント開会にあたってのご挨拶をさせていただきます。

岡室美奈子
演劇博物館　館長

早稲田大学演劇博物館館長の岡室でございます。どうぞよろしくお願い致します。本日はみなさまお忙しい中、演劇博物館主催のオンラインイベント「『Japan Digital Theatre Archives』からひろがる、舞台芸術アーカイブの未来」、ちょっと長いタイトルになっておりますが、ご参加くださいまして誠にありがとうございます。先ほど簡単な説明がありましたが、このJapan Digital Theatre Archives、通称JDTAは、現代演劇・舞踊・伝統芸能の3分野からなる舞台公演映像の情報検索特設サイトとして、昨年の2月に開設されました。ですから、開設から約1年が経ちます。当初は、JDTAを〈Webで〉検索しますと、〈日本ドッグトレーナー協会〉が一番上に出てきていましたが、おかげさまで最近はJDTAがトップにくることが、割と多くなってきておりまして、少しずつ浸透してきているのかな、と期待を込めて見守っているところでございます。

およそ1年経ったところで、JDTAがどのように活用されているのか、あるいはいないのか、また今後どのように充実させて、もっと活用させていくことができるのか。そういったことを、舞台制作の現場の方の意見をお聞きしながら、深めていきたいと考えております。ひいては、JDTAに限らず、舞台芸術アーカイブの未来を展望するような、そういう会になればと思っております。今日は素晴らしいゲストをお迎えしております。SPAC静岡県舞台芸術センター芸術局長の成島洋子さん、そして木ノ下歌舞伎主宰の木ノ下裕一さんです。ゲストのお二人とともに、JDTAそして舞台芸術アーカイブの未来について考えて参りたいと思っております。少し長丁場となりますけれども、最後までごゆっくりお楽しみください。みなさまから、ご質問やJDTA活用のアイディアなどもチャットでお寄せいただければと思っております。どうぞよろしくお願いします。

中西　それでは第1部に移りたいと思います。はじめに、当館のパートとして発表を行います。JDTAを担当しています松谷はるなからJDTAの概要について、中西から当館でのデジタルアーカイブについてのご紹介をさせていただきます。続いて、JDTAへの映像資料等の資料提供のご協力いただきました団体さまより、ご発表いただきます。資料をご提供いただいた経緯やエピソードなどをご紹介いただくとともに。今後広く舞台関係資料がアーカイブ化された時に、制作現場での活用の期待や、一般利用などでの活用の可能性などについてご紹介いただきます。

第1部
JDTAの紹介

松谷はるな
演劇博物館

*A｜EPADホームページ
https://epad.terrada.co.jp/index.php/epad/

*B｜EPAD事業 2020年度事業報告書(EPADホームページ)
https://epad.terrada.co.jp/index.php/2021/04/21912/

*C｜舞台芸術・芸能関係映像のデジタル保存・活用に関する調査研究事業
https://www.waseda.jp/prj-stage-film/

それでは、JDTAの紹介をさせていただきます。[†1]こちらにいらっしゃる皆様は、すでにJDTAをご覧いただいたり、ご利用されている方が多いとは思いますが、本日は、私どもが何を目指し、それをどのようにJDTAに取り入れ、取り組んできたかということなど、裏側のことをお話します。

Japan Digital Theatre Archives(JDTA)とは[†1,2,3]

JDTAは、文化庁芸術文化収益力強化事業のひとつであるEPAD事業、緊急舞台芸術アーカイブ＋デジタルシアター化支援事業[*A]の一環として演劇博物館が開設しました。EPADでは、4つの事業が行われており、JDTAには、スライド赤枠で囲っている[†2]「公演収録・既存の公演映像のアーカイブ化・配信可能化事業」にて新たに収集された1,283本の公演情報などが掲載されています。こちらの事業内容に絞ってお話します。EPADさまのホームページには、EPAD事業全体のことを大変丁寧にまとめられた実績報告書[*B]がありますので、お時間のあるときに是非そちらもご覧ください。

JDTAは、実は大変短い期間、およそ半年で作成しました。[†3]2020年10月に、このプロジェクトが演劇博物館の中で発足され、そこから12月頃に資料が届きはじめ、編集や整理などを行い、2月23日にオープンしました。これだけ短い期間でつくられたアーカイブですが、もともと演劇博物館が2014年から2015年に「舞台芸術・芸能関係映像のデジタル保存・活用に関する調査研究」事業[*C]で調査を行い、多くの舞台公演映像は、劇団や劇場などの手元にそのまま残されており、DVDやVHSは劣化の危機にさらされていることを把握していました。そのような問題意識の下でJDTAの制作に取り掛かることができました。

JDTAの開設で目指したこと・取組みに関して、5つほどポイントを絞ってお話します。

JDTAの特徴 1. デザイン[†4]

メタデータやチラシ画像、舞台写真等を紐付けて総合的に見せることで、実演家や演劇ファンの方にも使いやすいデザインを目指しました。

JDTAの特徴 2. 3分の抜粋映像[†4]

EPAD事業で配信を目指すという権利処理が完了し、配信が可能となった映像については、すべて3分程度の抜粋映像を観られるように公開し、集客に貢献したいという考えがありました。現在、291本の作品の権利処理が完了し、JDTAでご覧いただくことができます。具体的に見てみましょう。みなさん、JDTAの公演の情報をご覧になられたことはありますでしょうか。縦の長いページになっていますので、一部を抜粋して掲載しています。[†5]文字情報と画像を組み合わせることで、公演の概要が一見して分かるようなデザインにしています。いわゆる情報サイトや、公式ページの作りと同じですので、多くの実演関係者やお客様には、あまり違和感がないかなと思います。スライド左上の緑色で囲った公演としての情報、その下赤で囲った映像の情報とそのメタデータ、中央青で囲ったチラシや舞台写真などの画像とそのメタデータ、右下赤で囲った演目情報と演目ごとの出演者・スタッフの情報、というように細分化されています。右下の演目というのは、少し馴染みのない方がいらっしゃるかも知れません。現代演劇では、ひと公演いち演目ですが、今回収集された邦楽の公演では、誰々の回、何月何々の回のようにひとつの公演の中に演目が複数ありますので、演目ごとに出演者などが記載できるような情報の持ち方をしています。ご提供いただいた情報は、「この情報はここのカテゴリだね。」というように、演劇博物館側で編集を行い掲載するという流れで作業を行いました。

JDTAの特徴 3. 日英2か国語対応[†4]

JDTAの開設で目指したことのひとつに、作品概要、カンパニー紹介、上演記録等のメタデータ等を英訳し、日英バイリンガルサイトとして国際発信することで、海外からのアクセスを促進したい、ということがありました。スライドのように日英2か国語サイトになっています。英語でデータをお持ちの劇団さま、劇場さまには、日・英

図A-1

図A-2

図A-3

両方のデータをご提出いただき、それ以外の場合については、すべて英語に翻訳し掲載しています。閲覧に関する情報を集めたところ、2022年1月初め現在、全体の約10％の方が海外からのアクセスです。[†6]

JDTAの特徴 4. 多彩な検索[†4]

多彩な検索機能も演劇博物館が目指したことのひとつです。作品名やカンパニー名、俳優名、役名、スタッフ名など、さまざまな条件で検索できるように利便性を追求しました。検索機能については、2つほど工夫しています。

1つ目が、〈偶然の出会い〉[†7]です。JDTAは、多くの演劇ファンの方に使っていただきたいという意図がありましたが、1,300本ほどの作品があると、なかなか自分の興味の範囲外の作品には辿り着きづらいということがあります。トップページに、作品のキーワードや、舞台写真をランダムで表示させる機能を持たせ、ここからふと気になる作品にアクセスできる機能を設けています（図A-1）。ご提供いただいた皆様には、作品をタグ検索できるように、キーワードをご提出いただきました。そのキーワードを検索画面にランダムに表示させることで、偶然の出会いができるための検索機能を設けました（図A-2）。

2つ目が、〈詳細検索機能〉[†8]です。全公演から、任意のキーワードでの検索ができるのはもちろんのこと、公演の分野を絞ったり、上演年を絞ったり、スタッフだけを絞ったり、スタッフと出演者に絞ったりなど、条件を組み合わせて利用できる検索機能など、いろいろな検索方法ができるよう工夫しました（図A-2, A-3）。

JDTAの特徴 5. 利活用[†5]

JDTA開設の準備段階から、新しく収集する資料については、さまざまな利活用を目指していました。演劇博物館での展示利用、AVブースでの一般の方への視聴、そして早稲田大学内での教育利用を行うことなど、日本の舞台芸術の実践と研究の発展に寄与するための取り組みが挙げられます。

活用事例[†9]

今年度（2021年度）から具体的に本格化しました。演劇博物館で行なう関連するテーマ展示に利用すること。6月からは、一般の方を含め事前予約いただいた方には、当館AVブースにて公演の本編すべてをご覧いただけるサービス[*D]を開始しました。サービスの開始にあたっては、セキュリティを強化するために、物理的なメディアにコピーできないように、新たなシステムを導入しました。今後は、早稲田大学の授業での活用などにも、積極的に利用していきたいと考えています。

同意の取得[†10]

このように、即座に活用を始めることができた最大の理由は、〈同意の取得〉です。ご提供いただく公演映像は、デジタル化や非営利利用など、現在の著作権法の許す範囲で、予め同意を取得しました。非営利目的での視聴・上映、教育利用について、「もし希望されない場合は、（同意書に）チェックをしてください。」という形で、みなさまから同意をいただきました。そのおかげで、ご寄贈いただいた映像が、演劇博物館の中に保管されているだけではなく、資料の活用が進んでいます。多くの方にご利用いただき、研究や新たな創作活動に繋がって欲しいという思いを込めています。

収集体制[†11]

この半年間で1,300本もの映像を集めることができ、活用にまでこぎつけられた最大の理由に、〈収集の体制〉が挙げられます。こちらは[†11]、EPADさんの事業報告書から抜粋した体制図です。演劇博物館は、この大きなプロジェクトの中のひとつの役割に過ぎません。公演情報をご提供いただいた劇団の方、劇場の方、そして提供いただくにあたって取り纏めをしてくださった協力団体の方、そしてそれを集めて演劇博物館に送ってくださるEPAD事務局の方、そしてその過程で我々の活用のために、同意を取得する作業をしてくださった権利処理チームの皆様という連携があってこそ、この

*D｜演劇博物館ホームページ「映像・デジタルデータ資料の閲覧」
https://www.waseda.jp/enpaku/jdta/

短期間で新たに映像を大量に収集し、活用するところまでこぎつけることが出来ました。今後、JDTAがますます広まり、拡充させるにあたっては、やはり演劇博物館だけの力では難しいので、このような協力体制が取られると良いなと思っています。駆け足になりましたが、私からは以上です。

第1部
演劇博物館でのデジタルアーカイブ活動の紹介

中西智範
演劇博物館
デジタルアーカイブ室・写真室

少し駆け足となるとは思いますが、演劇博物館のデジタルアーカイブについてご説明させていただきます。[†12] デジタルアーカイブの大まかな流れとともに、演劇博物館の運営する『演劇情報総合データベース』[*E] についてお話し、その演劇情報総合データベースと、今回のJDTAの特徴の違いについて触れてみたいと思います。第2部座談会のキーワードとなるかもしれない、〈ドーナツ型の収集〉という考え方についてお話するとともに、演劇博物館が目指す、モノのアーカイブからコトのアーカイブへ、という内容でご紹介します。

演劇博物館[†12]

演劇博物館では100万点を超える古今東西の舞台芸術資料を所蔵し、保存や研究などの目的のため、資料デジタル化を行なっています。収蔵資料の情報は、広く一般に提供するため、目録情報にデジタルデータを加え、データベース化して公開しています。

デジタルアーカイブの大まかな流れ[†13]

寄贈や購入された資料は、資料整理や目録化とともにデジタル化が行われ、公開前には館内限定の収蔵品管理システムに一旦登録されます。その後、研究者や一般の方に検索できるよう、演劇情報総合データベースにて公開されます。デジタル化されたデータは、画像利用申請という利用サービスを通じて一般に利活用いただいています。2020年度の統計ですが、画像利用は213資料・85件と、1週あたりおよそ1.5件の申請と、幅広くご利用いただいています。

『演劇情報総合データベース』[†14]

演劇情報総合データベースは2001年に公開されました。現在では、大学共通のプラットフォームである『文化資源データベース』[*F] にて運用されています。およそ86万件が資料情報として公開され、画像データのほか、3D（図B-1）や映像、音声などのコンテンツを多く掲載していることが特徴です（図B-2）。研究・教育利用を促すための豊富な検索機能を持つなど、今後も公開資料の拡充や機能追加などにより、利活用しやすいデータベースを目指しています。

アーカイブの特徴の違い[†15]

ここでは、演劇情報総合データベースとJDTAの特徴の違いについて触れてみたいと思います。演劇情報総合データベースでは、チラシ・舞台写真・衣装など、博物館の資料整理業務に沿って対応が行われるため、それぞれがサブデータベースとして分割されます（図B-3）。それぞれの資料が、どの公演の資料なのかについては、資料整理の過程では特定が難しい場合が多く、資料と資料の関係は、後の調査研究で明らかになる情報といえます。それに対してJDTAでは、上演団体等から直接的に資料を収集しているため、公演情報を核にした総合的な情報管理が可能となっていることから（図B-4）、資料と資料の関係が明確です。演劇総合データベースはより研究者目線、JDTAは一般の方にも利用しやすいという特徴があります。

ドーナツ型の収集[*16]

演劇博物館でよく話題に上がる〈ドーナツ型の収集〉についてご紹介します。まず、舞台芸術やパフォーミングアーツは、それそのものをアーカイブすることはできない。という考えに基づいています。アーカイブとして埋めることのできない舞台上演のまわりを構成する様々な関係資料や情報、それらを可能な限り収集しながら、ドーナツのパーツを充実させていくというアーカイブの手法のたとえです。（図B-5）

モノのアーカイブからコトのアーカイブへ[†19]

最後に、演劇博物館としてアーカイブの目指す方向性についてお話しします。現在は、博物館という特性上、資料としての物が収集の中心となる活動を行っています。将来においては、情報や資料同士の関係性を繋ぐことで新たな価値を生み出す事が可能と

***E**｜演劇博物館ホームページ「映像・デジタルデータ資料の閲覧」
https://www.waseda.jp/enpaku/jdta/

***F**｜早稲田大学文化資源データベース
https://archive.waseda.jp/archive/

図 B-1

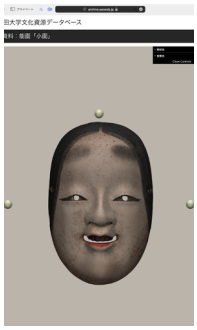


図 B-2

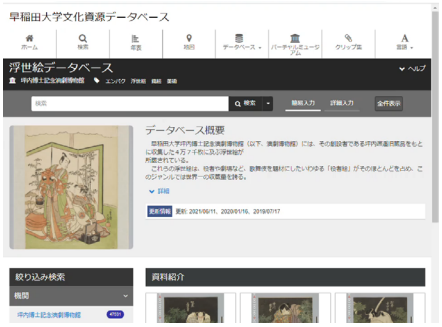


図 B-3

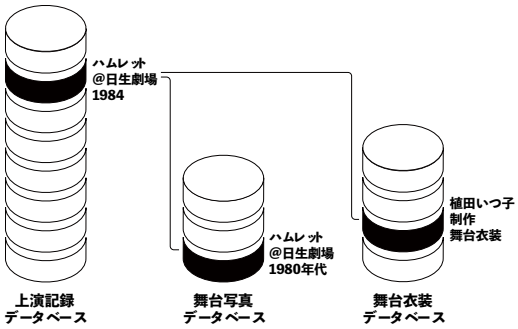


図 B-4

考えています。例えば、ある上演の初演情報が検索できること。例えば、初演台本の原作が図書館分野の情報とつながること。例えば、舞台が翻案・映画化されたとして、映画分野における映画作品の情報とつながること。例えば、舞台美術の作家情報が美術館分野における人物情報とつながること。など、モノからコトへのアーカイブへシフトさせ、他分野との情報連携を強化することで利活用の価値が高められることを期待しています（図 B-6）。ご清聴ありがとうございました。

図 B-5

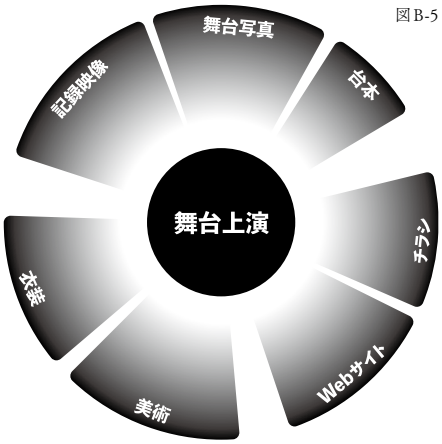
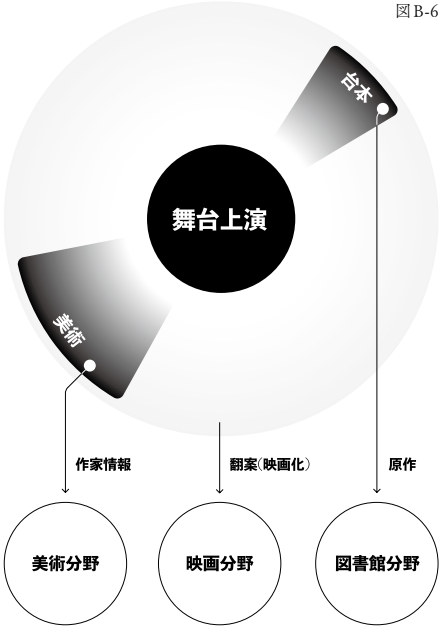


図 B-6



第1部
事例紹介「SPAC- 静岡県舞台芸術センター」

成島洋子
SPAC- 静岡県舞台芸術センター
芸術局長

静岡県舞台芸術センターの芸術局長の成島洋子と申します。本日はどうぞよろしくお願いいたします。SPAC静岡県舞台芸術センター[*G]について簡単にご紹介させていただきます。[†20]

SPAC- 静岡県舞台芸術センターについて[†21]

1997年から、静岡市にあります静岡芸術劇場と、舞台芸術公園にあります劇場稽古場施設群を拠点に活動を開始した、静岡県が設立した財団法人です。専用の劇場と専属の劇団を持つという形で、初代の芸術総監督が鈴木忠志さん、2007年から現在には宮城聰（図C-1）が芸術総監督を務めています。

〈舞台芸術作品の創造と上演〉が一番大きなミッションです。毎年春のゴールデンウィークの時期に、国際演劇祭である『ふじのくに⇄せかい演劇祭』[*H]、10月から3月にかけては『SPAC 秋→春のシーズン』[*I]にて、SPACのレパートリー作品の上演を行っています。この秋から春のシーズンで上演される演目は、週末に一般公演を行ないながら、平日に静岡県の中高生に劇場に来て鑑賞いただくという、中高生鑑賞事業も同時に行っています。人材育成事業として、中高生を中心にした様々な人材育成プログラムを実施しています。

SPACからEPADへの映像提供[†22]

松谷さん発表の事例で、SPAC作品の『オセロー』[*J]をご紹介いただきましたが、SPACからEPADへの情報提供は、ここに示している作品です。「観劇三昧」[*K]（図C-2）で映像も配信しているのが、上の段に書かれている作品。[*L]そして、演劇博物館でご視聴いただける、アーカイブとしての資料提供は、下の段に書かれている作品[*M]です。SPACでは2008年位から、プロの映像スタッフの方を入れて映像データを撮りためていたのですが、JDTAもしくはEPADから「映像資料の提供を。」とご連絡頂くまで、なかなかその活用方法がありませんでした。舞台映像を、地元静岡の映画館で上映する機会も一度あったのですが、常にウェブサイト上で映像を公開するという形でもなく、映像資料が手元にあるという状態でした。お声掛けいただいた時に、本数に上限がありましたので、山ほどある中から資料とリストをご提供し、「著作権の関係なども含めて配信できるもの、それからアーカイブとしてご提供するもの。」と、映像を振り分けて提供させていただきました。

コロナ禍での舞台映像化の取組[†23]

こうしたことの契機になったのは、コロナ禍での活動です。コロナ禍のSPACでは、『ふじのくに⇄せかい演劇祭』が一番大きな中心となり、それを『くものうえ⇅せかい演劇祭』[*N]として実施しました。これは、国際演劇祭である『ふじのくに⇄せかい演劇祭』の役割を、世界への窓としての役目を閉じないために、雲の上、つまりオンライン上の演劇祭として実施するというものでした。実にこの期間中、49に上るさまざまなコンテンツを配信しました。2020年夏には、劇場での公演はまだまだ手探りの状態でしたが、さまざまな場所に演劇を届ける『SPACの劇配！～アートがウチにやってくる～』[*O]という事業を行ないました。そのうちのひとつに『噂のSPAC俳優が教科書朗読に挑戦！～こいつら本気だ』[*P]という、ちょっとタイトルが変わった映像を作成しました。これは、静岡県内の小・中・高の国語の教科書を、SPAC俳優が朗読をしている動画です。当時、学校の給食時間は、黙って食べなければいけないという状況でした。そうした中で、この朗読動画を流すという試みを行い、学校の給食時間に活用されました。国際交流基金[*Q]のYouTube配信プラットフォーム『STAGE BEYOND BORDERS』[*R]が立ち上がり、新規での舞台映像の撮影、オリヴィエ・ピィの『グリム童話』2作品[*S]の撮影と、『アンティゴネ』[*T]の配信、この2作品は、多言語字幕を付けた配信にも取り組みました。

演劇文化＝歴史の蓄積[†24]

アーカイブについて。SPACの先ほどの秋から春のシーズンでは、古今東西の名作戯曲をラインナップするSPACの舞台を、数年観続けると演劇の教科書と言えるラインナップになる、ということを目指して作品選定を行っています。現在上演しているのは、泉鏡花の

*G｜公益財団法人静岡県舞台芸術センター (Shizuoka Performing Arts Center : SPAC)
https://spac.or.jp/

*H｜『ふじのくに⇄せかい演劇祭』
https://festival-shizuoka.jp/
https://spac.or.jp/project/festival

*I｜『SPAC 秋→春のシーズン 2021 – 2022』
https://spac.or.jp/au2021-sp2022/index_21-22

*J｜『オセロー』
https://enpaku-jdta.jp/detail/09114-03-2016-01

*K｜オンライン観劇サービス『観劇三昧』
https://v2.kan-geki.com/

*L｜スライド上段の作品は以下。
黄金の馬車（2013）、冬物語（2017）、ミヤギ能 オセロー～夢幻の愛～（2018）、マダム・ボルジア（2019）、グスコーブドリの伝記（2015）、アンティゴネ（アヴィニョン版）（2018）

*M｜スライド下段の作品は以下。
黒蜥蜴（2016）、ペール・ギュント（2010）、メフィストと呼ばれた男（2015）、サーカス物語（2013）、真夏の夜の夢（2011）

図 C-1

『夜叉ヶ池』[*U]です。昨年11月・12月には、チェーホフの『桜の園』[*V]を上演しました。

演劇文化というのは〈歴史の蓄積の上に成り立っているもの〉と考えています。日本の小・中・高の学校教育では、演劇というものが教科として取り入れておらず、演劇史を勉強する機会もなかなかありませんが、「演劇の教科書があったとしたら、どういうものがラインナップに並ぶだろうか。」ということを考えながら作品選定を行っています。こうしたものを上演していく時に、「以前に『桜の園』が誰によってどういうふうに上演されていたのか、『夜叉ヶ池』はどういうふうに上演されていたのか。」ということは、演出家や俳優たちにとってだけではなく、観客にとっても、その時の上演を楽しむひとつの題材となります。

演劇の歴史をつなげていくために[*28]

演劇の歴史を未来につなげていくために、今回のようなアーカイブ作業というのはぜひ続けていっていただきたいと言うのが私どもの願いです。と言いますのも、やはり静岡で活動していますと、首都圏のような常に演劇の話題あるいは公演情報など、いろんな情報が溢れているところとも違い、実際にはなかなか観に行くことができません。そうした文化情報の格差というものを解消するためにも、こうしたアーカイブ・プラットフォームというのは非常に重要だと思っています。松谷さんのお話の中にもありましたが、おそらく劇団・劇場ごとでは、記録活動をしていると思います。そのことをプラットフォームの形で繋げていくことで、観客の記憶から時代の記録へと変換できると考えています。現在、特に国外との行き来が困難な時代において、グローバルな視点からの作品評価などが難しい中、アーカイブに向き合うということで時代の中の作品の立ち位置が分かってくることもあるのではないかと考えています。演劇博物館で企画されました展覧会『失われた公演――コロナ禍と演劇の記録／記憶』[*W]は本当にそういった意味で、時代の記憶を刻む作業であったというふうに考えております。以上、簡単ですが事例紹介としてお話させていただきました。ご清聴ありがとうございました。

***N**｜『くものうえ⇅せかい演劇祭2020』
https://spac.or.jp/project/festival
https://festival-shizuoka.jp/2020/information/5542/index.html
SPACは2020年04月03日、『ふじのくに⇄せかい演劇祭2020』の開催中止と、同会期中の『くものうえ⇅せかい演劇祭2020』の開催を発表した

***O**｜『SPACの劇配！～アートがウチにやってくる～』
https://spac.or.jp/delivery_2020

***P**｜『噂のSPAC俳優が教科書朗読に挑戦！～こいつら本気だ』
https://spac.or.jp/2020-6/rodoku

***Q**｜独立行政法人国際交流基金（The Japan Foundation）
https://www.jpf.go.jp/j/index.html
総合的に国際文化交流を実施する日本で唯一の専門機関

***R**｜『STAGE BEYOND BORDERS –Selection of Japanese Performances–』
https://stagebb.jpf.go.jp/
国際交流基金が主催するオンライン配信プロジェクト。新型コロナウイルスの影響により日本の舞台公演に接する機会を求める世界の人々に向けて、日本の優れた舞台公演作品をオンライン配信する

***S**｜『グリム童話～本物のフィアンセ～』
https://stagebb.jpf.go.jp/stage/grimms-fairy-tale-the-real-fiancee-spac/

『グリム童話～少女と悪魔と風車小屋～』
https://stagebb.jpf.go.jp/stage/grimms-fairy-tale/

***T**｜『アンティゴネ』
https://stagebb.jpf.go.jp/stage/antigone/

***U**｜『夜叉ヶ池』
https://spac.or.jp/au2021-sp2022/yashagaike_2021

***V**｜『桜の園』
https://spac.or.jp/au2021-sp2022/thecherryorchard_shizuoka

***W**｜2021年度春季企画展『Lost in Pandemic ――失われた演劇と新たな表現の地平』
https://www.waseda.jp/enpaku/ex/11841/

2021年度春季企画展『Lost in Pandemic ――失われた演劇と新たな表現の地平』
https://www.waseda.jp/enpaku/ex/11841/

第1部
事例紹介「木ノ下歌舞伎」

木ノ下裕一
木ノ下歌舞伎　主宰

*X｜木ノ下歌舞伎 official website
https://kinoshita-kabuki.org/
木ノ下歌舞伎とは、歴史的な文脈を踏まえつつ、現代における歌舞伎演目上演の可能性を発信する団体。あらゆる視点から歌舞伎にアプローチするため、主宰である木ノ下裕一が指針を示しながら、さまざまな演出家による作品を上演するというスタイルで、京都を中心に2006年より活動を展開している。

*Y｜東京芸術劇場 Presents 木ノ下歌舞伎『三人吉三』
http://kichisa2020.com/
https://kinoshita-kabuki.org/kichisa20

*Z｜『三人吉三』公演中止のお知らせ(2020.05.08)
http://kichisa2020.com/?p=86

『三人吉三』にまつわるコラムと、出演者メッセージ動画の公開
https://kinoshita-kabuki.org/2020/05/30/7215

*AA｜「新型コロナウイルス」(60) コロナ危機下の舞台芸術　岡室美奈子・早稲田大学演劇博物館館長、児玉竜一・早稲田大学演劇博物館副館長 2021.4.23
https://www.youtube.com/watch?v=Hx0gD1x9JMk

木ノ下歌舞伎の木ノ下と申します。よろしくお願いいたします。このようなアカデミックな場所にお呼びいただきまして、大変恐縮しております。木ノ下歌舞伎*Xという劇団を主宰しておりまして、どういう劇団かと申しますと、歌舞伎の演目を現代演劇に作り変えているという劇団です。コロナ禍で目覚しい活動をしたわけでもなく、コロナ禍におけるさまざまな配信で頑張ったわけでもありません。そんなに目覚しいことはなかったと思うのですけれども、こういう場にお呼びいただいて、「大変どうしてかしら?」と思いながらお話しております。おそらく、アーティストと言うと非常に口幅ったいようですけれども、実作者としての視点ということでお呼びいただいたのではないかなと思いますので、コロナ禍での、アーカイブについて考えたこと・体験したことを中心にお話しさせていただいと思っています。

緊急事態宣言による公演の中止

振り返れば2020年でしょうか。1回目の緊急事態宣言が出たあたりは、公演自体がたくさん中止になっていました。東京芸術劇場で上演予定だった『三人吉三』*Yという作品は、うちの劇団にしては割と大きな規模の作品です。台本もできて、さぁ稽古に入ろうかという時に、どうも上演が怪しそうだとなりました。ぎりぎりまでオンラインで稽古をしていたのですけれども、その最中に1回目の緊急事態宣言が出てしまいましたので、敢え無く中止*Zということになりました。今となっては、「本当に上演できるだけでラッキー」という感じになりつつありますけれども、当時はその後もどんどんと中止が続いていくので、大変気落ちするわけですよね。出会ったことのない事態であったわけです。

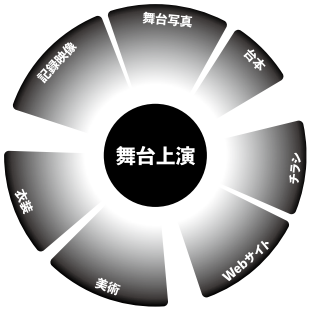
緊急事態宣言が出て間もなくだと思うのですけれども、いち早く演劇博物館さんが、上演できなかった作品の資料を集めますという呼びかけをして下さいました。私がこの話から始めたいのは、私達つまり演劇人が、あの呼びかけにどれだけ勇気付けられたか、ということです。本当に嬉しいニュースで、かなり塞ぎ込んでいる中で大変勇気をもらいました。上演出来ずに上演していない作品は、当然ながらアーカイブが残りづらい・ほぼ残らないわけですが、そういうものこそ今集めておこうという演劇博物館さんの心意気を非常に感じ、「我らがエンパクがやってくれた。」というような気持ちになりました。また、この例えが適切かどうかわかりませんが、「個人としても、納骨する先が見つかった。」ような気持ちになりました。チラシにしても台本にしても、さまざまな作成途中のものが多くあり、行き場がないわけです。それを演劇博物館さんが引き取ってくださることで、一種の作品の供養ができたような気がしました。

演劇博物館さんの岡室館長と児玉竜一副館長の両先生が、『「新型コロナウイルス」コロナ危機下の舞台芸術』*AAとして、記者クラブで発表した動画が配信されました。本当によい記者会見で、今でもYouTubeで見られますので、是非皆さんにおすすめしたいです。児玉先生からは、演劇、主に伝統芸能がどういう状況なのかについてのご発表でした。岡室先生からはアーカイブの重要性についてのご発表でした。これはなかなか演劇人から言い辛いこともたくさんございましてね。「演劇が大変だ。」というふうにいくら言っても、「ほかにももっと大変なところがある。」とか、そういうことになってしまいがちですので、いわゆるガチの演劇人ではない、周辺の批評家や研究者などからこういう声が上がると、発信してくださる言葉の心強さというものも感じた次第です。前置きが長くなって、もう半分過ぎてしまいましたけれども。JDTA が立ち上がって、お声掛けをいただいた時に、「いち早く、これは何か出来ることがあればご協力したい。」と思った次第です。

アーカイブの役割

先ほど中西さんから、「アーカイブはドーナツだ」(図D-1)という話があり、非常に面白い話だなと思いながら拝聴していました。特に演劇が好きだったり、演劇に関わっている我々は、コロナ禍になって、アーカイブの重要性や、劇場に行かなくても何らかの形で演劇に触れることができる配信の大事さを、身にしみて感じるわけです。私が非常に重要だなと思っていることがあります。それは、今我々も、どうすれば劇場にお越しなれない方にも、作品ないし様々なものをご提供できるかということを、日々考え、微力ながらに活動しているわけですが、これは私も含め多くの演劇人は、コロナ禍になってから考え始めた事だと思います。しかしながら、これはもう遅いと感

図D-1



じました。こういう状態になる前から、劇場に足を運びたくても運べなかった方が、たくさんいらっしゃったと思います。それは、ご自身のご病気や障碍であるとか、さまざまな家庭の事情とか、経済的な事情もあるかもしれません。では、そういう劇場に来られないお客さんに、「我々は、お客さんだと思っていたかどうか?」ということを考えることになりました。つまり、劇場に来られる・見に来てくださる方々だけをお客さんだととこかで認識していて、その外側に、アーカイブも含めて届けることの大切さを、実は今まであまり考えてこなかったのではないか、という大変大きな反省です。そのことは、まず自分自身の肝にも銘じておきたいなと思います。裏を返せば、これはもし今回のコロナの疫禍が収束したとしても、やはり重要なアーカイブの問題、もしくは劇場に足を運べない方にどう届けるかという試みは、この後も継続して残さないといけない、取り組んでいかなければならないことだと思いました。演劇博物館さんの様々な取り組みやJDTAを含め、そういうものは益々大きな力になっていくのではないかと感じます。

上演作品の配信化の試み

私の劇団では、いろいろとどういうことができるかなと考えながら活動していました。多くの劇団の方々がされたと思いますが、配信です。去年の初めに上演した、『義経千本桜―渡海屋・大物浦』*AB の有料配信を行ないました。『三人吉三』が上演できなかったため、「何か東京芸術劇場*AC さんとできないか?」ということで、『歌舞伎ひらき街めぐり』*AD というタイトルの歌舞伎講座を配信中です。これは、ある歌舞伎演目と、その演目にまつわる主に東京の土地を絡めながら、土地の歴史を紐解き、また歌舞伎演目の理解を深めていくという内容です。全3回のシリーズで、現在3回目の配信と、過去の1回目・2回目を再販売しています。単に私がお話するだけだとつまらないなと思いましたので、原作の一部分、つまり歌舞伎のセリフや歴史的な文献などを、木ノ下歌舞伎によく出ていただく俳優さんに朗読してもらうことで、お楽しみいただけるようにしたパートもあります。三味線音楽を新しく作曲し直して、それをBGMに使ったり、イラストやグラフィックを多用したりして、NHKの教育番組のような作りで、目にも楽しんでいただこうという趣向でやっています。

本当に微々たることをやっているわけなのですが、この〈微々たること〉が非常に重要な気がします。なぜ微々たることかと言うと、やってみて分かったのですが、やはり急にはなかなかいろいろな事はできません。それまで劇団が何を考えてきたかということが物を言うのだと思いました。それまで全く配信とか、劇場の外に何かを届けるということに関心を持たなかった劇団が、急に何かやろうとなっても、なかなかノウハウもありませんし、発想自体もなかなか出ないということだと思います。中途半端では、それに本当に意味があるのかどうかということもあります。コロナ以前に、劇団が何を考えていたかが、今非常に問われているのではないかと思います。

言い方として、非常に語弊があるかもしれませんけれども、あまり無理をしないことが重要ではないかなという気がします。ある一定のクオリティとスムーズさで、「これなら自信を持ってうちの作品で・うちの責任を持ったものでございます。」と、届けることができるかを、よく考えていく必要があるではないかなという気がします。

『木ノ下歌舞伎叢書』でのアーカイブ機能

木ノ下歌舞伎では『木ノ下歌舞伎叢書』*AE という本を、4巻まで出しています。最近なかなか出せていなくて、頑張ろうと思っています。作品の上演台本に注釈を山ほどつけることで、なぜこういう本になっているのかを解説し、アーティストのインタビューや舞台写真、台本などが掲載されています。上演にまつわる様々な事や、何を考えたかなど、どのような上演であったかが分かるように、上演後に丸ごとアーカイブしようという思考の元で作っています。古典演目にまつわる歌舞伎講座もたくさんやらせてもらっていますので、いままでの武器をどのように応用できるかを試行錯誤しながら、微々たることですが、少しずつ試みを始めたところです。脈絡のない話しで恐縮でございますけれども、詳しくはこの後の座談会でお話できればなと思いまして、私の時間はここで終えたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

*AB｜『義経千本桜―渡海屋・大物浦―』
https://kinoshita-kabuki.org/tokaiya2021

*AC｜東京芸術劇場
https://www.geigeki.jp/
公益財団法人東京都歴史文化財団が管理運営を行う芸術文化施設。都民のための音楽・演劇・歌劇・舞踊等の芸術文化の振興とその国際的交流を図るため、平成2年10月に開館。所在地は東京都豊島区西池袋。

*AD｜『歌舞伎ひらき街めぐり ～木ノ下裕一の古典で読み解く江戸⇄東京講座～』
https://www.geigeki.jp/performance/event284/

*AE｜木ノ下歌舞伎 official website ニュース「『木ノ下歌舞伎叢書』創刊!」(2015.3.15)
https://kinoshita-kabuki.org/2015/03/15/3715

木ノ下歌舞伎オンラインショップ『木ノ下歌舞伎叢書』
https://kinokabu.thebase.in/categories/292208

第2部
座談会「舞台芸術アーカイブの役割と期待」

成島洋子
SPAC-静岡県舞台芸術センター
芸術局長

木ノ下裕一
木ノ下歌舞伎　主宰

岡室美奈子
演劇博物館　館長

***AF**｜オンライン展示『失われた公演――コロナ禍と演劇の記録／記憶』
https://www.waseda.jp/prj-ushinawareta/

2021年度春季企画展『Lost in Pandemic――失われた演劇と新たな表現の地平』
https://www.waseda.jp/enpaku/ex/11841/

中西　ここからは第2部に移りまして、アーカイブの話題を掘り下げながら、登壇者3名でディスカッションを行います。タイトルは「舞台芸術アーカイブの役割と期待」です。ここからは、館長にバトンタッチして進行します。

岡室　それでは、第2部の座談会「舞台芸術アーカイブの役割と期待」に移らせていただきます。成島さん、木ノ下さんどうぞよろしくお願いいたします。

木ノ下　はい。お願いいたします。

成島　よろしくお願いします。

岡室　たいへん面白いお話をお二方からお聞きすることができて、とても感動しております。成島さんから、演劇文化が歴史の蓄積であり、演劇博物館の『失われた公演』*AF展も時代の記憶であると言っていただきました。木ノ下さんからは、劇場の外側にいらっしゃる方もお客さんであり、劇場の外側に何をどう届けていくかが大事なのだというお話をいただきました。舞台芸術アーカイブが、まさに歴史を蓄積していくものですので、JDTAがどのように貢献できるかを一緒にお考えいただきたいと思います。座談会では、JDTAをこれからどのように、さらに充実させていくことができるのか。そしてJDTAをこれからどう活用していけばよいのか。そして舞台芸術アーカイブの未来はどうあるべきか。そういったことについてお話させていただければと考えております。どうぞよろしくお願いいたします。

木ノ下　お願いいたします。

成島　お願いします。

岡室　私からご指名させていただく場合もあると思いますけれども、自由にどんどんご発言いただければと思いますので、ざっくばらんによろしくお願いいたします。

Japan Digital Theatre Archivesの充実にむけて

岡室　JDTAは、2020年度の文化庁の収益力強化事業の一環であるEPADさんからの委託事業として、実質3か月で制作しました。本当に死に物狂いで作りましたので、それなりに良いものになったのではないかという自負はあるのですが、まだまだ足りないと思っております。実際に舞台芸術の制作に携っているお立場から、実際に使っていただいてどのように感じられているか、今後充実させていくとすれば、どういうことを充実させていけばよいのかについて、お話しいただければと思いますが、いかがでしょうか？

成島　3か月という短い期間で、あれだけのものが集められたというのは、やはり、みんな映像を持っていたのだということ。そして、それを記録として活用したかったのだということが、改めてはっきりと分かったことだと思います。創作の現場でどう活用できるかと考えていくと、JDTAを検索していくことの面白さは、50年とか100年の長いスパンで、時間が経てば経つほど増していくのではないかなと思いますね。

岡室　ありがとうございます。木ノ下さんいかがですか？

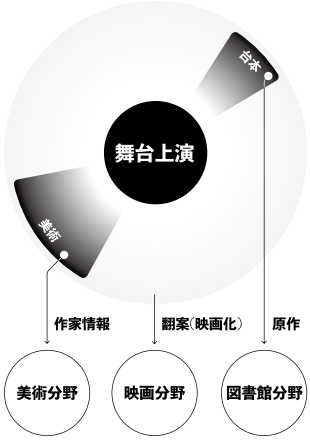
木ノ下　今でも、非常に楽しく拝見していますけれども、どんどんと層が分厚くなっていくと、より充実していくのだろうなと思っています。木ノ下歌舞伎は『勧進帳』*AGだけですので、もっとたくさんの作品を（アーカイブさせたい）と思っています。岡室先生、本当に面白いものをお作りになりましたね。

岡室　ありがとうございます。

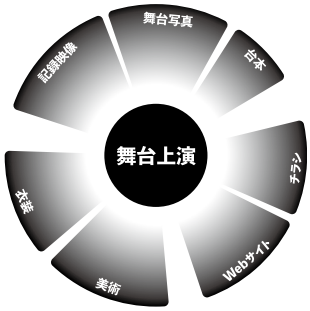
木ノ下　良いところ、面白いところを挙げていくときりがないですけれども。スタッフの名前で検索すると、そのスタッフがどういう作品に関わってきたかが分かるので、スタッフの情報が網羅されていることも非常に素晴らしいことですよね。チラシがあったり、かなり詳しい公演の情報が、パッと出るのが、とても素晴らしいところです。中西さんの発表で、現代美術などいろいろなところと繋げていける（図E-1）というお話がありました。なるほど、これは一番の魅力かなと思ったのですが、〈芋づる式に楽しめる〉ということですよね。つまり、何か目当てのものを探していたけれども、「あっ、この作家は他にこういう作品作ってるのか。」「同じ演目を違う劇団がやってるんだ。」など、どんどんと芋づる式になっているのが、大きなミソだなと思います。何かを深めたいと思う時って、基本的に芋づる式ですよね。我々、どんどん興味も移っていきますし、その芋づる式な深め方を非常にサポートしているのが、たいへん素晴らしいところだなと思います。

岡室　ありがとうございます。成島さんからは50年、100年後に

図E-1



図E-2



なるともっともっと活用できるのではないかというお話をいただき、木ノ下さんからは芋づる式という素敵なキーワードが出ました。先ほど中西から「舞台芸術のアーカイブというのはドーナツだ」という話がでまして（図E-2）、これは演劇物館の基本的な考え方ですが、要するに、舞台公演自体は幕が閉じると同時に消えてなくなってしまうものなので、それ自体は保存することはできないわけですね。ドーナツの真ん中の空洞が実際の舞台公演だったとすれば、その周辺を固めていくことで、後の人がどのような舞台公演であったかを、できるだけ正確に想像することができるようになると思うのですね。50年、100年後の人たちが、例えばこの2020年あるいは2022年の舞台がどうだったのかを、できるだけ正確に想像できるようにドーナツを固めていく。そういう中で、やはり今回収集した公演映像は、おそらくドーナツを固める最も強力な要素だろうと思います。

木ノ下さんに言っていただいたように、舞台公演映像だけではなく、芋づる式にいろいろな資料を見ていただくために、スタッフの名前などをはじめとする情報を、できるだけ多く載せるようにしたのですが、何か足りないものはありますでしょうか？成島さんのお話で、演劇博物館の「失われた公演」展が時代の記憶であるというお話がでましたよね。演劇をアーカイブする時に、記憶、例えば創った方々の記憶をいかにアーカイブするかということが、大きな課題のひとつだと個人的には感じています。そのような意味では、先ほど木ノ下さんからお話があった『木ノ下歌舞伎叢書』や、いろいろなことが関わると思います。もうひとつは、観た方々の記憶ですよね。1,000人の方がいれば1,000通りの記憶があるわけで、記憶をどのようにアーカイブしていくかということも、今後考えていきたいと思います。そのような感じで、「JDTAにこういうものもアーカイブしていけばよい」というご提案があれば、教えていただきたいと思うのですが、いかがでしょう？

木ノ下　創り手の声というのは、本当に大事ですよね。（演劇博物館の）『ロスト・イン・パンデミック』（『Lost in Pandemic ――失われた演劇と新たな表現の地平』[*AH]）の展示でも、1つの大きな目玉は、やはり創り手の声、インタビューですよね。そういうものが少しでも見られるのもよいかなと思いますし、様々な演劇の証言など、古典でいえば芸談のようなものが見られると、とてもよいなと思ったりします。

岡室　JDTAにご協力いただいて、映像もご提供いただいていますが、例えば、観た方が感想を書き込んでいく機能があるとすると、ひょっとしたらそれは良いことばかりではない（批判的な感想もある）かもしれないですよね。そういう機能はいかがですかね？

成島　演劇の上演そのものも、ドーナツの真ん中のように消えてしまうものですが、その時の客席の熱気みたいなものも、そのものとしては残っていないじゃないですか。私たちも、60年代の小劇場ブームやアングラのもので、客席に人がギュウギュウに入っている様子が映っているのを観て「あぁ、こういう熱気だったんだろうな。」ということは感じるのですが、客席自体は映っていなかったりします。観客の声、観た人の声みたいなものって、確かになかなか残っていないですね。今だと、Twitter（ツイッター）やTogetter（トゥギャッター）のようなまとめサイトなどに溢れたりして、公演する側は残したりしていますが、現状ではアーカイブとして残すということはしていません。

岡室　そうですね。確かにTwitterにかなり感想は溢れるけれども、消え去ってしまうところはありますよね。消え去ってしまうというか埋もれてしまうというかね。

木ノ下　作品の劇評が、ずらっと見られたりするとよいですね。

成島　そうですね。

木ノ下　劇評は劇評家という専門職の方の視点ではありますけれども。どんな劇団も、よくお客さんにアンケートを書いてもらっていますので、その一部分抜粋や、いくつか象徴的なものを劇団側が選ぶのはよいかもしれません。お客さんの声は難しくて、酷評ばかりが並んだりすると、創り手としては「いや、それだけじゃなかったよ。」と言いたくなったりもするかもしれませんが。しかしながら、その時に「いいのばっかり選ばないで下さい。」というのが大事で、創り手側がくみ取ってほしかった意見や、けちょんけちょんに言っている酷評のものなど、5つぐらいバリエーションを作っておいて、「アンケートから選んで、これ全部埋めてください。」のようにして、多様性をキープするというのも一個の手かもしれませんね。

岡室　なるほど。それは良いアイディアかもしれませんね。先ほども説明がありましたが、演劇博物館の以前の調査で、各劇団や劇

***AG**｜『勧進帳』木ノ下歌舞伎
https://kinoshita-kabuki.org/works/kanjincho
https://enpaku-jdta.jp/detail/09667-01-2016-02

***AH**｜早稲田大学演劇博物館2021年度春季企画展『Lost in Pandemic ――失われた演劇と新たな表現の地平』
https://www.waseda.jp/enpaku/ex/11841/

場が舞台公演映像を撮りためていることが分かっていました。けれども、ほとんどが撮りっぱなしで死蔵され、大量のVHSが日々劣化に晒される〈VHS問題〉もあったのですね。そのため、舞台映像を収集して、責任をもってアーカイブとして未来に継承していきたいということは、ずっとずっと思っていたのですが、財源がなくて実現できませんでした。幸いにして、この文化庁の収益力強化事業のお金で、スタートラインには立てたと考えています。ただし、今後これを拡充していくにあたって、お金・人手、そのあたりをどうするかという問題があるので、今後できるだけ、劇団さんや劇場さんに自立的に協力していただくような仕組みが作れないだろうかと考えています。例えば、〈著作権の壁〉ということがありますよね。それを越えるために各劇団や劇場が、これから公演をされる時に、あらかじめ出演者やスタッフの許諾を得ておいていただき、公演映像や関連資料に、例えば劇評やアンケートなどを含めて、演劇博物館にご寄贈いただくようなシステムができないかと思っています。これは、かなりうちに都合のよい話かもしれないのですが、もちろん演劇博物館がお手伝いをしながら（劇団や劇場に）ある程度自立的に、パッケージとして頂くようなことは、今後可能になりませんでしょうかね？

成島　SPACの場合、出演者について言えば、最初に契約書を交わすので、そういった意味ではクリアしていけるかなとは思います。けれども一方では、うちの俳優が他のところに客演[*AI]などで出させていただく時などには、契約書まで交わさない場合も多く、「映像の取り扱いについてよくわからないまま進んでしまった。」という話は聞きます。あとは、私たちも戯曲や音楽の著作権の部分について、まだノウハウがそれほどないというところは、あるかなと思います。

岡室　ありがとうございます。舞台芸術の著作権は非常に複雑ですけれども、JDTAを委託してくださったEPAD事業が優れていたのは、著作権の処理を含めたところなのですね。これを機に、舞台芸術界全体で権利処理の意識が高まっていくとよいなと考えております。劇団さん劇場さんによって、舞台映像をDVDにして販売されたりなどいろいろなご事情があると思うので、公開するかしないかはケースバイケースだと思います。映画でいえば国立映画アーカイブ[*AJ]のように、舞台芸術アーカイブとしてまとめておくことで、確実に未来に継承していけるシステムを作っていけないかと考えておりますので、改めて御相談させていただければと思います。

配信とアーカイブ

岡室　いろいろご質問をいただいておりますので、ご質問にお答えしながらいきたいと思います。成島さん、木ノ下さんへ、配信についてのご質問をいただいています。

――――演劇には生で見るからこその良さがあると思います。しかし、コロナ渦にあって映像で届けることも多くなっている現状だと思います。そこで何か工夫されていることはありますか。

――――演劇の映像記録でカメラのカット割りのない正面全景のみのトラックを独立して記録・提供するという考え方はありませんか。つまり、舞台全体を把握するためにテレビとは違った配信を観てみたい場合があります。たとえばアーカイブやDVDでも、全景と編集の2つの映像トラックを用意することは難しいでしょうか。

岡室　先ほどの、劇場の外にどう届けるか、ということに関連したご質問をいただいておりますね。非常に面白いご質問ですね。映像や公演記録映像といっても、実は本当に様々で、複数のカメラで撮影して、編集して、それ自体をひとつの作品として仕上げている場合もあれば、遠くからの固定カメラでずっと撮影している場合もあります。演劇の良さは、自分で視点を選べることなのだけれども、テレビ中継などでは、カメラの視点を強制されるようなことになってしまうわけですね。配信用の映像をどのように作るかは、なかなか難しい問題かと思いますけれども、そのあたりいかがお考えでしょうか？

木ノ下　お2つ目の質問からいきましょうかね。これ面白いですよね。1つ目のご質問と繋がりますが、「演劇は生だ。」本当にその通りだと思います。生で観てもらうことを前提に作品を創っていますし、ある時間と場所を共有しながら届ける芸術ですよね。ですが、そ

*AI｜客演
俳優が自分の所属ではない劇団などに出演すること

*AJ｜国立映画アーカイブ
https://www.nfaj.go.jp/
独立行政法人国立美術館が運営する。日本で唯一の国立映画専門機関である国立映画アーカイブは、映画の保存・研究・公開を通して映画文化の振興をはかる拠点として「映画を保存・公開する拠点としての機能」「映画に関するさまざまな教育拠点としての機能」「映画を通した国際連携・協力の拠点としての機能」の機能を持つ

れを劇場の外にどう届けるかという時に、もちろん生には及ばないけれども、生で観た時の体感を味わっていただけるように工夫するという方向性ですよね。これに関しては、カメラも何カメかで撮って、「今、ここ観てほしいんです。」という場面をカット割り編集で誇張しながら、「体感しているときは、こういう興奮と緊張感があった作品なんです。」と、再現しようとする方法で進めていくと、記録性の側面では、「いや、ほんとは違うとこ観たいんだけどな。」や、古典では、「この時の違うこの六代目を観たい。」などが多々起こるわけです。記録に特化するのか、生で観ているような臨場感に特化するのかによって、映像の作り方が随分変わってきます。ご質問のように両方フォローでき、2パターン用意することができればよいのですが、予算とか労力が割けなかったりして難しいところです。記録用と、お楽しみいただく為の再現用という2つの方向性を考えておきたいと思いました。

岡室　はい、ありがとうございます。8K[*AK]カメラなどが普及すると、1台のカメラで撮影しても、いろいろと改善されていくのかもしれませんけれどもね。成島さんいかがですか？

成島　1つ目のご質問の、映像ならではの工夫ですが。私どもは、『くものうえ⇅世界演劇祭』の時に、初めてながら、映像での配信をトライアンドエラーみたいな感じでさんざんやってみました。演劇の〈カニカマボコ〉[*AL]という言い方をし、どうしたらオンラインでも演劇の生の楽しみを伝えられるかを試してみたのですが、先ほどのドーナツではないですが、生の楽しさそのものを伝えることは、やはり難しいということも残りました。今では、映像用に作ることが最初から分かっているものについては、映像ならではの演出を加えた映像作品を作っています。例えば、国際交流基金さんの「STAGE BEYOND」で舞台上演を撮影した、『グリム童話』では、森の中や劇場を、俳優がいる状態であらためて撮影し、2つの世界観の違いを映像作品として表すというような映像を作りました。

正面のカメラカット、非常に面白いご指摘だなと思いました。まさに私たちも、内部で再演を重ねるたびに、「何年版の映像だとここが写ってないけれども、何年版ならここ写っている。」みたいなことを言っているくらいです。日々の稽古や公演の記録映像は、カメラ割りせずにずっと正面から撮っています。それだとちょっと小さくて、とても外に出せるようなものではないですけれども、再演の時に参照するのは意外と固定カメラから撮影した映像です。その映像を、YouTubeの限定URLで公開して、座組でもう一回見ることもやっているので、お客様にも需要があるのだなということが、非常に面白いなと思いました。

岡室　なるほど。たいへん面白いお話、ありがとうございます。木ノ下さんがおっしゃった、記録か再現かというお話ですが。今ご覧になるお客様に楽しんでいただくためには、ある程度編集が入っていたほうがよいかもしれませんが、記録としてアーカイブに残していくことを考えると、やはり正面から全てを撮っている映像は必要なわけですよね。成島さんのお話を考えると、やはり両方必要なのだということをあらためて思いました。演劇博物館では、映像もよくご寄贈いただくのですが、貴重な稽古場の記録映像なども含めてアーカイブできていくとよいかもしれませんね。例えば、台本が完成稿だけではなく、草稿もあると非常に貴重です。モノだけではないコトとして、舞台芸術作品が生成されていくプロセス自体も、アーカイブ化できるとよいと思います。

木ノ下　本当にそうですよね。本来は、ドーナツの穴を想像させるためのアーカイブなのですが、アーカイブがどんどん充実していくと、穴があることを忘れてしまうというか、分かったつもりになってしまう現象は、よくあるなと思います。若い子たちに、「木ノ下歌舞伎観たことあります。」と言われて、「あっ、そうですか。ありがとうございます。」と言ったら、YouTubeで3分ぐらいの映像だった。ということもあります。YouTubeとの向き合い方が違うのだと思いますが、その世代にとっては、それでも観たというふうになるわけですよね。「穴なんだよ。ドーナツなんだよ。餡ドーナツではない。そのものでは穴があるんだ。その穴のためにこのアーカイブがあるんだ。」ということは、プロセスを理解してもらうことが非常に重要であると思います。「こういうふうに舞台ってでき上がっていって、しかも上演のたびにバージョンが違ったり、微妙に違ったりする。だから、やはり生で体感することが前提だし、そういうところにアーカイブの方向性が向いている。やはり創作していく中でどんどん移り変わっていく、同時代的な芸術なのだ。」ということがよくわかりますので。

岡室　ありがとうございます。JDTAでは、約3分の抜粋映像を

***AK**｜8K
水平方向の画素数が7,680(約8,000)の映像規格。4Kの約4倍、2K(フルハイビジョン)の約16倍の画面解像度をもつ

***AL**｜カニカマボコ
SPAC芸術総監督の宮城聰氏は、YouTubeを通じて「くものうえ⇅せかい演劇祭2020」の開幕メッセージを発信した。その中で、生の演劇を"カニ"、オンライン上の演劇を"カニカマボコ"に例えて表現した。

YouTube「くものうえ⇅せかい演劇祭」開幕メッセージ！(宮城聰)／Opening Message from MIYAGI Satoshi[2020/04/25に公開]
https://www.youtube.com/watch?v=H6CsT0KniUc&t=374s

『くものうえ⇅せかい演劇祭2020』
https://festival-shizuoka.jp/2020/

公開しており、その活用が課題と考えていますので、この後にその話題をさせていただきたいと思います。
ひとまずご質問に戻らせていただいて、関連する実際的なご質問が来ていますので、ご紹介します。

アーカイブ用の映像制作費はどのくらいかかるのでしょうか？またどこまでのクオリティが必要と考えているのか教えて頂きたいです。

岡室　というご質問がお二人に来ております。お差し支えない範囲で、お答えいただければと思います。
成島　劇場の大きさによって、カメラを何台配置するのか、何日撮るのかということで大きく変わってきます。たぶん、うちなんかは低予算でやっていただいているのですが。はい、そんな感じです。（笑）
木ノ下　そういう感じですよね。どこまでを求めるかということですよね。自分たちで撮影して、自分たちで編集する劇団さんもいれば、プロのクルーや撮影隊で撮影することもあります。我々がダメなところですが、「ほんと今回予算がなくて。」とお願いすることもあれば、「今回、少し劇場がついてて、余裕がありますんで、これぐらい。」とか、そういうかけひきもありますので、一概にいくらとは言いづらい。（笑）
成島　そうですね。今ここで、生々しい金額を言うとあれですよね。（笑）
木ノ下　わからないですが、ウン十万円くらいでしょうかね。規模にもよりますが、それぐらいだと思います。
岡室　本当にピンキリですよね。例えば、劇団の団員さんが撮影する場合もあれば、NHKやWOWOWのクルーが入ったりすることもありますしね。今回、JDTAで収集してみて、どういう目的で撮るかということは、やはり大事だと感じました。ただ記録として撮るのか、あるいはその映像自体を見せるために撮るのかということで、クオリティも大きく変わってきますよね。アーカイブと、映像自体を楽しんでいただくことの両面を考えると、やはり両方必要なのか、あるいは8Kカメラ撮影の1種類でよいようになるのか。そのあたりは、技術の進歩にも関わることなのかと思いますけれどもね。

アーカイブとしての〈観客〉の記録・記憶

岡室　撮影の問題についてご質問が来ています。

上演後の劇場のホワイエでの反応を録画していたことはあるのでしょうか？観劇後の皆様の生々しい反応が見れる気がします。興奮して御友人達とお話しされていて「ああ、良い上演だったのかな。」と思います。

岡室　これはなかなか難しいような気がいたしますが、いかがでしょう？
成島　何もないロビーやホワイエを録画することはないですけれども、終演後にアーティストトークを行う場合には、それを録画する場合はありますね。そこでのお客様からの質問や、舞台登壇者とのやりとりが残ることは、あるかもしれません。
木ノ下　そうですね、なかなかそれをやらないですけれども。成島さんの、「今の舞台映像では、あまり客席を映さない。」というお話は、確かにそうだなと思い、はっとしました。例えば、NHKの古典芸能の舞台映像を見ると、意外と客席が映っています。歴史的な歌舞伎の名舞台でも、子供の泣き声とかが普通に入っています。子供はよく泣くんですよ（笑）。当時の歌舞伎は、わりと子供がお母さんに連れられて、膝の上で観ていたのかなあと分かります。しかも、記録のための映像でもそのような状況です。当時は、子供の泣き声が入っていると、「なんなら邪魔だな。」ぐらいのことで、そこにアーカイブの重要性はなかったとは思うのですが、今となっては、それが一種のアーカイブになっているということがあります。寄席番組とかですと、笑っているお客さんの顔をよく映しますよね。これも非常によいアーカイブで、「意外とダイマル・ラケット[*AM]は若い人多いんだな。」とか、「光晴・夢若[*AN]はやっぱりお年寄りが多いんだな。」とか、そういうことがわかったりするので、ちらっと映り込む客席は、非常に重要な情報が込められているなと感じます。
成島　なるほど。

***AM**｜中田ダイマル・ラケット
https://ja.wikipedia.org/wiki/中田ダイマル・ラケット
大阪を中心に活躍し、太平洋戦争後の上方漫才を代表する兄弟コンビ

***AN**｜松鶴家光晴・浮世亭夢若
https://ja.wikipedia.org/wiki/松鶴家光晴・浮世亭夢若
昭和期に活躍した日本の漫才師

岡室　そうですよね。

成島　今は、やはり映さない方向ですもんね。

岡室　おそらく、肖像権などの問題があるので、お客様のお顔が映り込んでいると公開できないとかさまざまな制約があるのだと思います。そこで、「今日は収録があります。」と通知したり、例えばチケットを売る時から、「この日は収録がありますから、お顔が映ってもいい方が来てください。」といった許諾を取っておくことができるとよいのではないでしょうか。今おっしゃったように、客席を見ることで当時のお客様の状況もわかったりしますし、客席がどう反応していたかの情報も大事だと思います。それこそ50年後、100年後に、お客さんたちはこのような感じだったとわかったりもするので、そういう可能性も開いていけるとよいですね。つまり、アーカイブ化することを視野に入れて、映像を撮っていただくことが大事なのだと改めて思いました。

木ノ下　そうですね。データということですよね。例えば、研究のためのアーカイブも必要ですよね。後世の人間が、かつての何かを調べる時に、一番わからないのはお客さんのことですよね。「この公演は男性女性がいったい何人ぐらい観に来てて、どの年齢層がよく観てたんだろうか。」ということは、意外と分からないものです。どんな層のお客さんが、主にこの演劇を愛していたのかということは意外と重要なのですが、なかなか残っていません。劇団側がある程度集計をとっておき、アーカイブのセットの中にデータを入れておくと、後世の人間は非常に助かるなという気がしますね。

岡室　そうですね。それは理想的ですね。例えば、コロナ禍でお客様の数が2分の1とか4分の1とか、そういう制約の中で上演される時に、客席の状況を記録で残すこともやはり大事だという気がします。いろいろご意見もいただいています。

3分映像の活用について

――――テレビの演劇番組で稽古のドキュメンタリーと本編の映像で構成されているものがあり、編集による演出はあるものの異なる舞台の稽古を見比べることには意義を感じました。JDTAでは稽古映像をアーカイブする場合もあるのでしょうか

岡室　先ほども少し触れましたけれども、やはり稽古映像も重要だと思いますね。今のところは、（上演映像の）1種類だけですが、例えば初演と再演の映像などいろいろ広げていけると可能性を感じます。

ここで少し話題を変えてみたいと思います。JDTAでは、3分の抜粋映像を公開しています。約1,300本の内、抜粋映像を公開しているのは、権利処理が済んだ290本くらいです。私たちとしては（抜粋映像ではなく）フルでご覧いただきたい。演劇博物館に事前予約の上お越しいただければフル映像を観ていただけますが、その一方で、3分映像をどんどん観ていただくことで、いろいろな劇団や劇場や演劇に関心を持っていただきたいとも思っています。3分は意外と長いので、この3分映像を何とかして楽しく活用できないかということを考えています。今の若い方は、YouTubeの影響もあり、短いものに慣れているし、3分映像を二次利用していくことも割と得意だと思います。（劇団の中には）非常に作り込んだ3分映像をくださっているところもあるのですが、ほとんどの場合は、演劇博物館で機械的に3分を抜粋して公開しています。それはもったいないと思っていて、できれば（劇団側に）3分の箇所を指定する、あるいは編集していただくことができれば、もっともっと面白い3分映像になっていくのではないかと考えています。例えば、その3分映像を観た一般の方々が演じてみて、「やってみた映像」を作るとか。

成島　3分でできますか。（笑）

岡室　例えばですね。（笑）別の文脈に置くような使い方もできないかなと。ちょっと邪道かもしれませんが。デジタルデータですからいろいろな形で再利用していただくことで、元の演劇に関心を持っていただく。そういうこともできないかなと考えているのですが、そういうのは、邪道でしょうかね？

木ノ下　例えば、演出家の副音声がつくとかね。

岡室　あっ、なるほど。

木ノ下　「このシーンは（こういう場面である）」というのを、3分でまくしたてるように副音声がついているとか。副音声が有っても無くても聞けると、違った面白味があるかなと感じました。

成島　面白い。

岡室　副音声というアイディア、面白いですね。

岡室　やはり、配信が非常に重要になるため、JDTAでもデジタルアーカイブであることをもっともっと活用したいと思っています。ただ配信するだけだと、宮城さん（SPAC芸術総監督）がおっしゃったように、〈カニカマボコ〉かもしれませんが、さらに何か別のものとして楽しむことができないかという可能性を考えたときに、副音声は、やはり配信ならではですものね。

成島　うーん。

木ノ下　やはり創った本人が喋っているのが一番面白い。ということもありますから。

岡室　ですよね。それは、是非つけていただきたい。副音声有りバージョン、無しバージョンとか。面白いですね。どうぞお聞きになっている皆様も、こういうのがあったらよいというアイディアがあればお寄せいただければと思います。

バリアフリーとアーカイブ

岡室　重要なご意見ありましたので、ご紹介させていただきます。

――――*バリアフリーの観点からも、ぜひアーカイブ化と配信に取り組んで頂けたら嬉しいです。私も含めてさまざまな理由があって、劇場に行きたくても行けない方々が本当に多くいらっしゃいます。寝たきりになっても、映像は観られる、文章は書ける、という方々がレビューや批評を書く才能を発揮できると思います。みんなの力を合わせて、文化を育んでいけたら嬉しいです。*

岡室　非常に良いご意見いただきましたが、いかがでしょう？

成島　本当にそうですね。映像ならではの特徴として、字幕をつけられるということもあるなと思っています。他言語化も含めてですけれども、日本語の字幕をつけることで、聴覚に障碍のある方が楽しむことができるということもありますし、映像化して配信することで、アプローチできるところは、本当にたくさんあるなと感じています。

岡室　字幕はよいですね。JDTAは日英2か国語サイトですので、その映像自体にもいくつかの言語の字幕がつけられるとよいですよね。ありがとうございます。実は、私は乾燥すると咳が出てしまう体質です。今劇場に行って咳をすると、周辺の人が青ざめるので、なかなか行き難い状況にあるので、配信で観られるととてもありがたいです。貴重なご意見ありがとうございます。

木ノ下　このご質問は、本当に大事なご質問で、おっしゃる通りだなと思いました。公演の映像だけではなく、いろいろな意味でのアーカイブを作るということと、バリアフリーということは非常に近いところにあり、「一緒にやっていけるんじゃないかな。」と思っています。例えば、台本の貸出は、劇団が聴覚障碍のある方に、労力をかけずにできることのひとつと思います。2週間前から台本貸し出しをしようと思えば、上演の中でぐちゃぐちゃにいろいろ書き加えられた台本からきちんと読めるように、1本作らないといけないわけですが、それが一種のアーカイブ化になります。台本を分散させず、ひとまず上演台本の完成形を作るというアーカイブ化と、台本を貸し出すこととが同時にできるはずです。その他にも、「この俳優さんはこの役ですよ。」ということを事前に写真撮影し、俳優さんの声を先に聞いていただいておくと、目に障碍のある方は、声でどの役かが分かったりするらしいです。これは、その時どういう衣装であったかとか、どういう俳優さんが上演したかということのアーカイブにもなるわけですよね。バリアフリーのことを進めていくと、自然にアーカイブはたまっていくことだと思いますので、これを同時に行うことができれば、意義も高まるのではないかなという気がしました。

岡室　ありがとうございます。そのように考えていくと、非常によい方向にいきそうな気がいたしますね。いろいろなお体のご事情などで劇場に行けなくても、配信やJDTAなどに触れることで、レビューや批評などを書くことができます。SDGs[*AO]を持ち出すまでもなく、どなたも取り残さず、みんなでアーカイブを作っていくということをやはり考えるべきですね。アーカイブは、演劇博物館が作るとか、劇団さんが作るとかではなく、やはりみんなで作っていくものだということを、改めて学ばせていただきました。本当にありがとうございます。

成島　こちらこそ、本当にありがとうございました。

木ノ下　そうですね。

***AO**｜SDGs
持続可能な開発目標（Sustainable Development Goals）は、17の世界的目標、169の達成基準、232の指標からなる持続可能な開発のための国際的な開発目標

他分野との連携、協力・協働・コラボレーション

岡室　そろそろ収束に向かわないといけないのですが、まだ少しご質問をいただいています。

――――他分野の舞台芸術（音楽やダンスなど）では、まだJDTAのような完成度の高いプラットフォームのない分野もあると思いますが、今後他の分野との連携などは考えられていますか？JDTAのような取り組みが、他の分野へも派生していくと良いと思っています。

岡室　ありがとうございます。ダンスではダンスアーカイヴ構想の非常に良いアーカイブサイト[*AP]がありますし、バレエも昭和音楽大学バレエ研究所の充実した『バレエアーカイブ』[*AQ]がありますので、少しずつアーカイブは整っていくと思いますね。やはり、デジタルデータは横の連携ができるというのがよいところだと思いますので、いろいろな分野と協働していきたいと思っております。JDTAはスタッフのお名前も出していますが、例えば舞台衣装のような分野に光をあてて、ファッション業界とコラボしていくような可能性を探るなど、外に広げていきたいとも考えています。お二人は、何かアイディアがおありではないでしょうか？

成島　うちには、衣裳や舞台装置のプランナーがおりますけれども、SPAC以外の舞台でもやらせていただく機会もあります。名前がひとつの作品から派生して、例えばそのデザイナーに新たな仕事が舞い込むことがあれば、非常に嬉しいなと思いますね。

岡室　そうですよね。なかなかスタッフの方のお名前は、あまり前に出てこないので、JDTAが活用できるとよいですよね。

木ノ下　「このスタッフさん他にどの仕事、あー、これもそうだったのか。」など、僕達は、よく使って調べています。

岡室　そうですね、スタッフのお名前でも検索できますので、活用していただければと思います。

さて、もっといろいろお話したいことがあったのですが、時間があっという間に迫ってまいりました。是非今後の創作活動にもJDTAも活用していただきたいと思いますし、できれば何らかの収益力強化にも結び付けていただければ、ということも願っております。今後アーカイブを充実させていくために、アーカイブ化を視野に入れた記録映像の撮影や資料収集などもおこなっていただけると、舞台芸術界全体でアーカイブ化の機運が高まっていくのではないか、という期待もしております。お二方から、今後舞台芸術のアーカイブを一緒に作っていくにあたり、お言葉を頂ければと思いますが、いかがでしょうか？

木ノ下　アーカイブはみんなで作っていくものだ、ということを今回改めて思い、発見でした。と同時に、アーカイブを作ることを考えた時に、3つぐらいの方向性があるのかなと思います。1つは、研究のためのアーカイブであるということです。できるだけ記録を重視して、研究者なりアカデミックに活用していくためのアーカイブが必要です。もう1つは、演劇好きな方に対するアーカイブです。「あの舞台観たけど、すごくよかった、記憶に残ってる、あれ何年の何だったかしら？」がすぐに分かったり、もしくは、その3分映像を観ながら、「ああ、そうだった、こういう舞台だった。」ということを思い出すための、演劇好きのためのアーカイブです。最後の1つは、演劇の魅力にはまり込んでもらうためのアーカイブ。つまり、どうやって演劇に興味をもってもらい、そのために、どのようにアーカイブを活用していくかということです。

この3段階は、各々でフックが違いますので、バランスよくやっていくことが非常に重要だと思います。僕は、JDTAのキーワード検索が好きで、たまにいろいろなキーワードを打ち込みます。〈恋愛〉と打ち込むと、目くるめく世界です。宮城さんの『黒蜥蜴』[*AR]から、こんにゃく座さんの『金色夜叉』[*AS]など、恋愛というキーワードの様々な作品が、ずらっと並びます。[*AT]おそらく、高校生とかが、「なんかこう、キラキラした恋愛の舞台ないかしら？」と思って検索したら、たぶん全然思ってもなかったようなものが出てくるはずで、そういう偶然性が非常に面白いなと思っています。偶然の出会いを、どういうふうにこちら側がアーカイブで演出できるか、そして、沼のようなドーナツの穴にどうやって入ってきてもらうか、の普及という意味でのアーカイブも非常に重要かなと思いました。

岡室　はい、ありがとうございます。成島さんお願いいたします。

成島　ドーナツ自体に穴があるということは変えられない、埋め

***AP**｜特定非営利活動法人ダンスアーカイヴ構想（NPO Dance Archive Network）
https://dance-archive.net/
大野一雄舞踏研究所を母体とし、そのアーカイヴ活動を引き継ぐ法人であり、舞踏及び日本洋舞史の重要な一次資料の収集、保存、公開活動などを行う団体

***AQ**｜『バレエアーカイブ』
https://ballet-archive.tosei-showa-music.ac.jp/
昭和音楽大学バレエ研究所 が運営する、日本におけるバレエ公演のデジタルアーカイブ。2020年3月に公開。

***AR**｜『黒蜥蜴』
https://enpaku-jdta.jp/detail/02633-08-2016-01

***AS**｜オペラ『金色夜叉』
https://enpaku-jdta.jp/detail/01951-01-1995-02

***AT**｜2022年3月現在、JDTAにおいて「恋愛」でキーワード検索を行うと、48公演の情報がヒットする

ようがないということを感じつつも、ドーナツの穴があることが、演劇の良さでもあり、演劇の力みたいなものを信じながら、私たちは、演劇という財産を長い視野で過去から未来に向かって繋げていく一過程にいるということを、今日改めて感じました。どうしても、日々移り変わる創作の現場にいますと、プロセスを飛ばしがちです。アーカイブの重要性を横に置いておいてしまうようなところもありますが、バリアフリーとイコールで進められるということに気づけたのは、本当に良かったなと思いました。私たちは、10年・30年・50年後の、まだ見えない誰かに向かって進めることはなかなか難しいですけれども、劇場の外にいらっしゃる方や、劇場に来られない方に向けても、この作業が何らかの役に立てるということに気づけたのも、非常に嬉しい発見でした。本当にたくさんの発見と気づきをありがとうございました。

岡室　ありがとうございます。すみません。質問を1つ漏らしておりました。これは、私への質問です。

――――アーカイブを演劇博物館内だけでなく、地方、遠隔地でも利用できるようになる可能性はあるでしょうか？

岡室　JDTAはもちろんどこからでもご利用いただけますが、舞台のフル映像は、演劇博物館に事前予約し来ていただかないとご覧いただけない仕組みになっております。国立国会図書館の配信*AUですと、連携する図書館等で、例えばデジタル化された脚本を閲覧することもできますので、国立国会図書館と組むことで、その方法をゆくゆくは舞台映像にも応用できないか、など方法を模索しており、将来的にはなんとか改善できないかと考えています。今日は、私も本当に勉強になりました。特にバリアフリーとしてのアーカイブを考えるきっかけをいただいたことは、本当に大きな収穫だったと思います。実際の舞台公演は、ドーナツの穴にあたるものであり、私たちは舞台芸術のアーカイブを作るときに、空洞を抱えたアーカイブしか作れない、また、アーカイブは決して万能ではないということについては、やはり謙虚でありたいと思っています。同時に、ドーナツの食べ方は本当にいろいろな食べ方があるので、様々な美味しいドーナツの作り方・食べ方を皆様のお知恵を拝借しながら、もちろん劇団や劇場の皆様にもご協力いただきながら考えていきたいと思っております。豪華なお二人のゲストをお招きしましたので、もっともっと幅広いお話を伺いたかったところですが、ご参加いただいた皆様からのご質問、ゲストからのお答えも含めて、本当に大変貴重なお話を伺えたと思います。あらためて、成島さん、木ノ下さんに御礼を申し上げます。ありがとうございました。

成島　ありがとうございました。

木ノ下　ありがとうございました。

岡室　おそらく、今画面の前で、皆様がゲストのお二人に拍手してくださっていることと思います。最後までお付き合いいただきました皆様にも、改めて御礼を申し上げます。どうもありがとうございました。

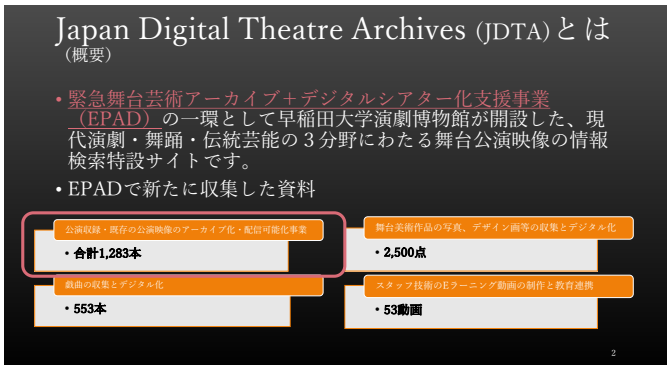
***AU**｜国立国会図書館「デジタル化資料送信サービス（図書館送信）」
https://www.ndl.go.jp/jp/use/digital_transmission/index.html
国立国会図書館のデジタル化資料のうち、絶版等の理由で入手が困難な資料を、国立国会図書館の承認を受けた全国の公共図書館、大学図書館等で利用できるサービス

巻末資料

†1

文化庁令和３年度「文化芸術振興費補助金地域と共働した博物館創造活動支援事業」
『新宿から発信する「コロナ以後の新しい博物館」プロジェクト』
オンラインイベント　『Japan Digital Theatre Archives』からひろがる、舞台芸術アーカイブの未来
Japan Digital Theatre Archives
2022年1月24日
早稲田大学 坪内博士記念演劇博物館　松谷はるな
1

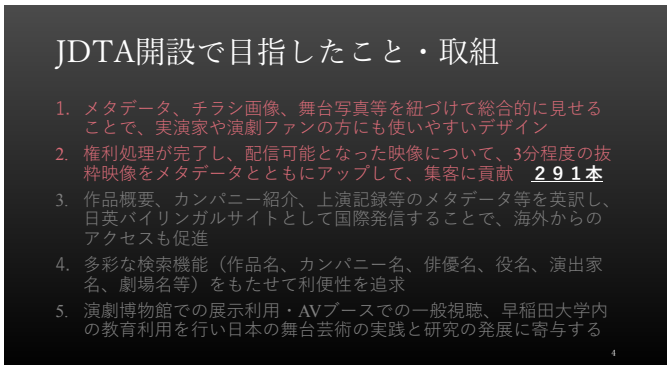
†2


Japan Digital Theatre Archives (JDTA)とは
（概要）
• 緊急舞台芸術アーカイブ+デジタルシアター化支援事業（EPAD）の一環として早稲田大学演劇博物館が開設した、現代演劇・舞踊・伝統芸能の３分野にわたる舞台公演映像の情報検索特設サイトです。
• EPADで新たに収集した資料
公演収録・既存の公演映像のアーカイブ化・配信可能化事業
• 合計1,283本
舞台美術作品の写真、デザイン画等の収集とデジタル化
• 2,500点
戯曲の収集とデジタル化
• 553本
スタッフ技術のEラーニング動画の制作と教育連携
• 53動画
2

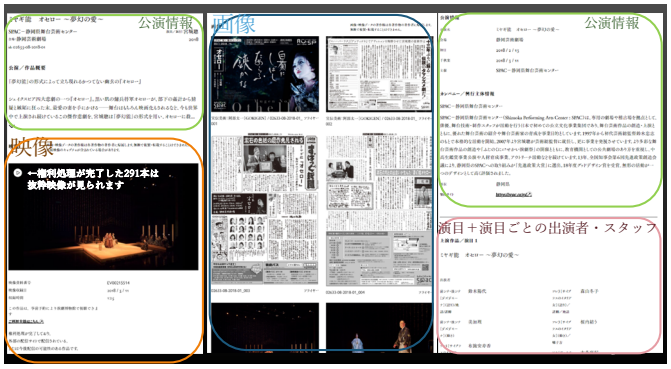
*3

Japan Digital Theatre Archives (JDTA)とは
（プロジェクト期間）
• 2020年8月末　EPAD事業の実施が正式決定
• 2020年10月　演劇博物館にプロジェクトチーム発足
• 2020年12月　映像等資料が本格的に届き始める
• 2021年2月23日　JDTAオープン
• 2021年3月25日　JDTAオープン第2弾（データアップデート）
3

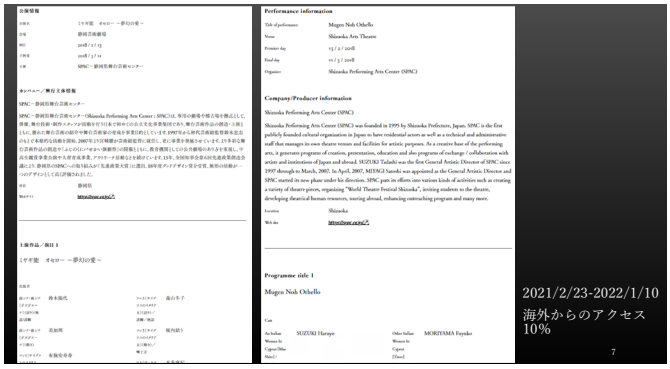
*4


JDTA開設で目指したこと・取組
1. メタデータ、チラシ画像、舞台写真等を紐づけて総合的に見せることで、実演家や演劇ファンの方にも使いやすいデザイン
2. 権利処理が完了し、配信可能となった映像について、3分程度の抜粋映像をメタデータとともにアップして、集客に貢献　２９１本
3. 作品概要、カンパニー紹介、上演記録等のメタデータ等を英訳し、日英バイリンガルサイトとして国際発信することで、海外からのアクセスも促進
4. 多彩な検索機能（作品名、カンパニー名、俳優名、役名、演出家名、劇場名等）をもたせて利便性を追求
5. 演劇博物館での展示利用・AVブースでの一般視聴、早稲田大学内の教育利用を行い日本の舞台芸術の実践と研究の発展に寄与する
4

†5


公演情報
映像
● ←権利処理が完了した291本は抜粋映像が見られます
公演情報
演目＋演目ごとの出演者・スタッフ

†6


Performance information
Company/Producer information
Programme title 1
2021/2/23-2022/1/10
海外からのアクセス
10%
7

†7

多彩な検索機能①　偶然の出会い

TOPページ
・ランダムに表示される作品キーワードから検索
・ランダムで切り替わる舞台写真から直感的に公演を探すことができる

検索ページ
・ランダムに表示される作品キーワードから検索

9

†8

多彩な検索機能②　詳細検索機能

・全公演から任意のキーワードで検索できる
・検索対象を公演情報・画像情報・映像情報と切り替えて検索できる
・公演名＋人名等複数キーワードから検索できる

10

†9

活用事例

- 演劇博物館で行う関連するテーマの展示に利用
- 演劇博物館内AVブースでの一般視聴（完全予約制）
  2021年6月より運用開始
  セキュリティ強化のため、物理的なメディアの持ち出しをすることなく、別室に設置した閲覧用PCにリードオンリーのデータを必要に応じてリンクすることが可能なシステムを新たに構築
- 早稲田大学内の授業等教育活動で利用

12

†10

同意の取得

- 提供いただく公演映像について、デジタル化や一定の非営利利用等、その時点での著作権法の許す利用がされ得ることについて

※下記の内容について個別に同意しないという意思表示も可
　非営利目的での視聴・上映
　非営利目的での教育利用

- 公演本編から一部抜粋することや、付随資料として提供いただいたチラシや舞台写真を利用すること

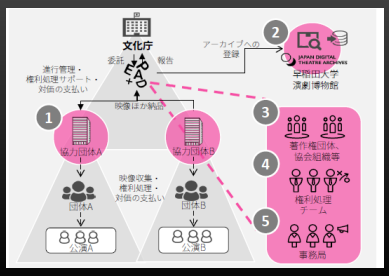
資料の活用が進む

13

†11

収集体制

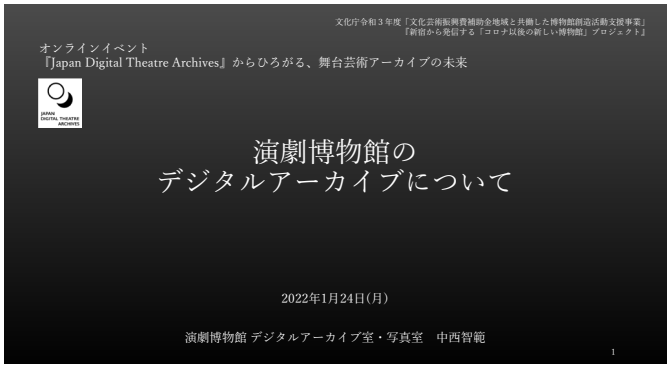
EPAD事務局・権利処理チーム・協力団体・公演実施団体が連携した実施体制によって、短期間での収集が実現。



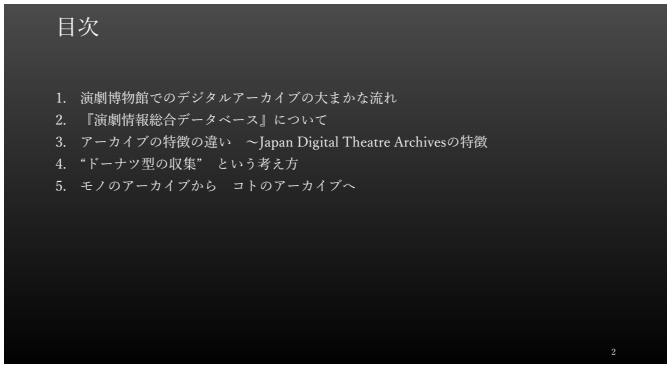
出典：舞台芸術の映像配信とアーカイブのこれから-EPAD事業報告書-

14

†12

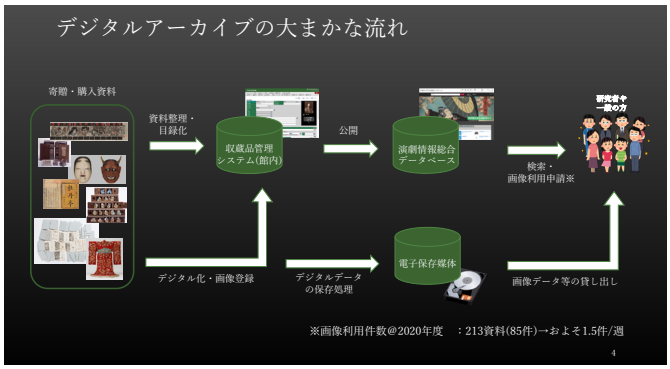


†13



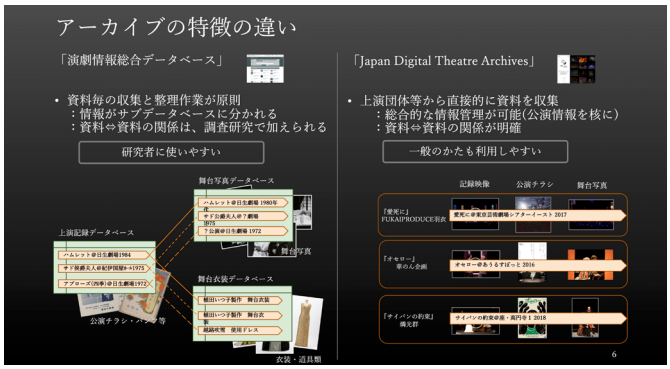
†14

†15

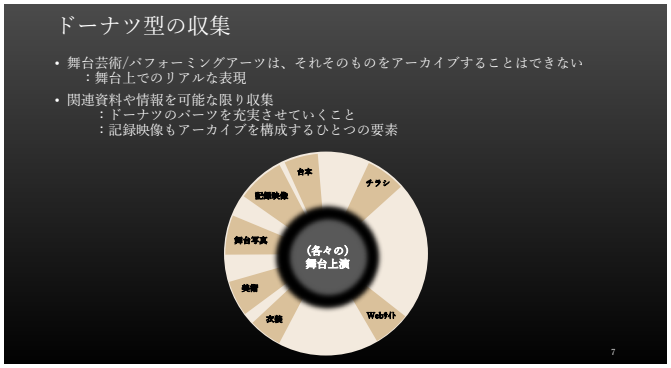


*16

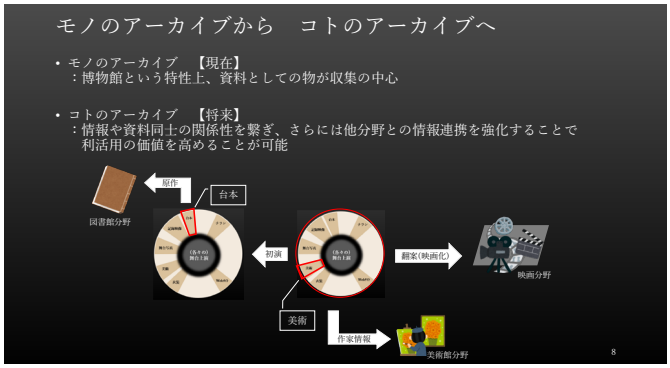
*17



†18



†19



† 20

JAPAN DIGITAL THEATRE ARCHIEVES

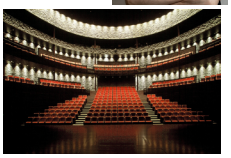
SPAC-静岡県舞台芸術センター
芸術局長　成島洋子

† 21

SPAC-静岡県舞台芸術センター

- 1997年より活動開始、初代芸術総監督鈴木忠志
- 静岡芸術劇場と舞台芸術公園の劇場、稽古場施設群を拠点に活動
- 芸術総監督宮城聰（2007年-）

- 舞台芸術作品の創造と上演、人材育成事業
- GW「ふじのくに⇄せかい演劇祭」
- SPAC秋→春のシーズン（中高生鑑賞事業公演）



† 22

SPACからEPADへの映像提供

【観劇三昧で配信】

- 黄金の馬車（2013）、冬物語（2017）、ミヤギ能　オセロー～夢幻の愛～（2018）、マダム・ボルジア（2019）、グスコーブドリの伝記（2015）、アンティゴネ（アヴィニョン版）（2018）

【アーカイブ】

- 黒蜥蜴（2016）、ペール・ギュント（2010）、メフィストと呼ばれた男（2015）、サーカス物語（2013）、真夏の夜の夢（2011）

† 23

コロナ禍での舞台映像化の取組

- 「くものうえ⇅せかい演劇祭」－演劇のカニカマボコー
  「せかいへの窓」を閉じないために。49にのぼる様々なコンテンツを期間限定で配信。
- 「SPACの劇配！」噂のSPAC俳優が教科書朗読に挑戦！～こいつら本気だ
  静岡県内の小中高の国語の教科書をSPAC俳優が朗読　配信動画154本

- 国際交流基金のYouTube配信プラットフォーム　STAGE BEYOND BORDERS
  『オリヴィエ・ピィのグリム童話』2作品の新規撮影
  『アンティゴネ』配信　　（多言語での配信）

† 24

演劇文化＝歴史の蓄積

- SPAC秋→春のシーズンのラインナップの考え方
- 古今東西名作戯曲をラインナップ
  （SPACの舞台を数年見続けると演劇の教科書と言えるラインナップに…）
- 2021→2022　チェーホフ『桜の園』泉鏡花『夜叉ヶ池』

† 25

演劇の歴史をつなげていくために

- アーカイブ作業は続けることが重要
- 文化情報の伝達：首都圏と地方／世界と日本
- アーカイブプラットフォームの重要性
- 劇団ごと／劇場ごとの記録をひらいていくことで、「観客の記憶」から「時代の記録」へ変換できる。
- 特に国外との行き来が困難な時代でグローバルな視点からの評価が難しい中、アーカイブに向き合うことで、時代の中の立ち位置がわかることもある。
- 「失われた公演」展は「時代の記憶」を刻む作業。